



飯香浦地蔵まつり飾りそうめん

長崎の祭り

夕方になると、参拝客がひっきりなしに訪れる。お地蔵様に手を合わせる姿は美しい。

日が傾きかけると、地蔵堂は、浴衣姿の子どもたちや地域の人たちでいっぱいになった。出店でおもちやを買う子どもや、ご近所さんとあいさつを交わす大人たちの表情は笑顔であふれ、皆がこの目を心待ちにしていたのが伝わってくる。

参拝客は五百年近く大切にされてきたお地蔵様に手を合わせ、そうめん飾りに目を見張る。「きれかね〜」「今年もよう出来とる」。そんな言葉がこちらから聞かれ、堂内は和やかな空気に包まれた。

午後六時。近くの寺から三人の僧侶が訪れ、念仏を唱え終わると、いよいよ祭りの最も重要な行事「鉦張り」が始まった。おそろいの浴衣を着た十名の男性が横一列に並び、鉦を叩きながら、念仏を唱える。「なんもうーほうおーほうーおー ほういどーおほほおーおほほおーおほーい」で始まる念仏は、独特の節回しで、そうめん編みと同様に口伝えて覚えるという。峰さんは「この念仏を覚えるのも大変なんです。今年も三週間前から、皆で練習をしました」と、教えてくれた。最初は一人ずつ唱える念仏だが、後半は全員で声を合わせ、心を合わせる。念仏が響き渡る堂内には、厳粛な中にも高揚感のようなものが漂い、人々はじつと耳を傾ける。

長老の男性は、「祭りは自分の小さな時から何一つ変わっていない」と話

す。そうめんの編み方も念仏も、祭りの終わりにそうめんを地域の人に配る風景も、そのまま受け継がれている。祭りの由来に始まり、なぜ鎧兜と幔幕をそうめん編むのか、なぜ団子を竹串に刺すのか、念仏の意味は「何一つ分らないが「先祖が続けてきたから」という理由で、この地の人々は祭りを守り、伝えてきた。しかし継承されてきたのは、祭りの形だけではない。地域の人たちがおしゃべりをしながら祭りの準備を進める姿、それぞれが率先して働き協力する姿、そして何よりお地蔵様への思いが受け継がれている。小さな頃から遊び場だった地蔵堂と、心のよりどころであるお地蔵様を、一年に一度美しく飾り、皆で手を合わせる。そこには、失われつつある地域の絆が確かにあった。

美しく飾られた幔幕と鎧兜。祭りの間、繰り返し行われる「鉦張り」。響き渡る鉦の音と念仏は、不思議な高揚感をもたらし、思わず手を合わせてしまう。

大切なのは、先祖からのバトンを つなぐこと。

